
カゲロウデイズ

ソフィア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カゲロウデイズ

【Nコード】

N6135Z

【作者名】

ソフィア

【あらすじ】

じんさん、しづさんの神曲、「カゲロウデイズ」のイナズマイレブンパロです。

お日様園の4TOPメイン。

・・・暑い。

本当に、その一言しか出てこない程暑かった。

「・・・あつ！

僕これがいい！スイカアイス！」

僕・・・陽炎^{ようえん}レインは、幼馴染と共に、

アイスを買いに來ていた。

勿論、このうざったい暑さに対抗する為だ。

僕が指しているアイスのパッケージを、隣にいるぼくの幼馴染、

涼野風介はふむ、と声を漏らした。

「確かにそれは美味そうだ。

じゃあ、私はソーダにでもするか・・・」

「風介！後で交換しようね！」

「ああ。

元々そのつもりで選んだのだからな。」

髪型といい、色といい。

全体的に涼しげな雰囲気の風介だけど、

やっぱり暑さには苦手らしい。

顔を見合わせて笑い合っていたら、

「って、何我が物顔でソレひつつかんで、

俺に差し出してくんだよっ!？」

急に叫びだしたもう一人の幼馴染。

南雲晴矢。

どうしたかと思えば、いつの間にか手から無くなっていたアイスの袋。

風介を見ると、

彼も同じらしく、不思議そうに眉を寄せていた（顔が怖いよ）

それで、

叫んでいた晴矢のほうを向けば、

「・・・あれ？」

何で晴矢が僕達の選んだアイス持ってるの？」

「い”！？

これはだん「そうか、お前か。覚悟は出来ているのだろうか？」・・

人の話を聞けええええええ！！！！」

「あははは！ざまあないね、晴矢。」

「てめっ！

ヒロトオオオオオ！！」

持っていたアイスを僕に（無理矢理）渡して、

ヒロト・・・僕の幼馴染ね。基山ヒロトだよ。

・・・を、追い掛け回し始めた。

こんな炎天下の中、よく走り回れるよね。

僕が苦笑にも似た、感心の笑みを浮かべているのをみたリュウジ、

あつ、又僕の幼馴染。緑川リュウジっていうんだ。

・・・が、優しく頭を撫でてきてくれた。

「あいつら、まだ追いかけてこ終わらないみたいだから、

先に買ってこよう?」

優しく微笑んだリュウジに、僕は大きく頷く。

「うん! 風介も行こ!」

「・・・そうだな。」

「善は急げって言うでしょ?

早くしないと、僕達の方まで溶けちゃうからね。」

三人でそうきめて、

店内へと入る。

・・・あつ。

「ヒロト!

僕達、一先ずアイス買ってくるね!」

手を大きく振りながら叫んだ僕に、

ヒロトはよろしくねーっと、手を振り替えてくれた。

晴矢の、悪い頼むとも、聞こえた。

二人共、

なんだかんだで優しいもんね。

少し前を歩いていた風介が、ふいに僕へと振り向いた。

「財布、ちゃんと持ってるか？」

「うん。あるよ！」

リュウジ、リュックの中から取って。」

「ん。了解。」

数十秒後に出てきた、熊の財布を見て、

風介が、偉い偉いと頭を撫でてくれた。

店員さんにアイスを渡して、お金を出して

袋を受け取って。

今日の僕は、とても手際が良かった。

うん！絶好調！

風介とリュウジに頭を撫でてもらって。

その後、手を繋いでくれた。

僕達が店内をでると、

ヒロトと晴矢はもうかけっこを終わらせていた。

「ごめんね、レイン。」

晴矢のせいで・・・」

「なっんで俺なんだよ!!」

まあ。ありがとな、レイン」

謝ったり、お礼を言ってくれたりする二人に、

僕は笑顔のまま首を振った。

「うつん。」

二人共元気だね。僕まで嬉しいや。」

えへへと照れて笑うと、

可愛いなコノヤローって頭をグシャグシャってされた。

ふふふって笑って、

リュウジの帰ろうかって言葉で、

僕達は家に向かって歩き出した。

その時、ふと時計を見たら、

12時半を指していた。

そりゃ、暑いはずだと納得する。

本当、病気になりそうな位強い日差しだよね。

汗が止まらない僕の額を、

ヒロトが苦笑しながら拭ってくれた。

「レインは暑さに弱いからね。」

「ありがと、ヒロト。」

「寒さにも、だけどな。」

「五月蠅いよ、晴矢。」

なんだとっ！って怒鳴ってきた晴矢を無視して、

風介とリュウジの後ろへささつと隠れた。

「晴矢、レインにこれから一切関わるな。」

私が許さない。」

「ごめん晴矢。今回は俺も、

許せないかな。」

「お前等なあっ!!」

「はははっ、ざまあないね、晴矢。」

「風介もリュウジもヒロトも格好いいぞ!」

僕の言葉に晴矢が反応し、

ヒロトを八つ当たりの如く追いかけ始めた。

又かよ・・・と吐息した二人と共に僕も苦笑した。

二人が走って行った方向は大通り。

車の行きかう道路。

僕達の歩いていた通りからは、横断歩道が見えた。

そっちに行ったら、遠回りになるよ。

そう言おうとして、二人の手を放そうとした時だった。

今まで蒼かった信号機が、

赤へと変わった。

「っ晴矢!!ヒロト!!」

目いっぱい叫んだ時には、

もう遅かった。

ドンっという何かがぶつかる鈍い音

キキーっ と甲高く泣き叫ぶブレーキ音

ぎしゃあああ と悲鳴を上げるスリップ音

目の前で見えたのは、トラックにぶち当たった二人。

僕の視界を支配したまっ赤な血しぶき。

僕の嗅覚を支配した二人の匂い。

二つが嫌に入り交ざって、むせ返った。

「晴矢ああああ！！！！」

ヒロトオオオ！！！！」

さっきのブレーキ音に負けないぐらい大きな悲鳴を上げた。

二人の手を振り払って走り寄る。

道路にあるのは、まっ赤な何かを引きずった跡。

この暑さのせいで、ゆらゆらと蠢く嘘みたいな陽炎に、

嘘だって呟いた。

そうしたら、

陽炎は

《嘘じゃないぜ》

って、僕を嗤った。

「晴・・・矢・・・」

ヒロ・・・ト・・・!!」

うわあああああ!!!!

「っレイン！」

「落ち着いてっレイン!!」

周りを行きかう車の轟々とした音でさえもかき消して、

僕は泣き叫んだ。

風介とリュウジの声が、

聞こえない。

倒れていた晴矢とヒロトが、

何故か満足そうに微笑んでいた。

*

*

*

「・・・」

ふと、目が覚めた。

五月蠅く鳴り響く目覚まし時計を消して、

むくりと立ち上がる。

立ち眩みがするくらいに蒸している部屋の中、

僕は何かに腕を引かれた。

「おはよう、レイン」

「おはよ。風介。」

重力に逆らわず、彼の腕の中に入る。

途端に、同じ石鹼を使っている筈なのに、自分とは違う匂いに包み込まれる。

「相変わらず、お前は小さいな。」

「風介が大きいんだよ。」

「私が大きいのではない。

レインが小さいだけだ。」

「なにおおおお!!!!」

「うるっせえーぞお前等!!」

「「おはよ、晴矢」」

「おっ、おう・・・」

いつの間にか出てきた晴矢に挨拶をすれば、

一瞬で意気消沈する彼。

「はははっ、朝から騒がしいね。

おはよう、レイン、風介、晴矢。」

「おはよ、ヒロト。」

「「おはよう」」

未だに抱きしめられたままだけど、

そのままヒロトに頭を撫でられる。

猫みたいにコロコロしていると、

「あはっ、レインってば猫みたいだね。」

「おはよう、リュウジー。」

髪をまだ結んでいないリュウジに頬を撫でられた。

皆がいて、普通な、

何時もの朝なのに、

何故か異常に安心している自分がいた。

*

*

*

耳障りな程に五月蠅い蝉の声。

病気になるんじゃないかってぐらい強い日差し。

リュウジの帰ろうって言葉で、

家へと歩き出す。

ふと時計を見れば、

12時半を指していた。

そこで、嫌な記憶がよみがえる。

胃の中から何かがせせり上がってくる様な感覚に襲われる。

喪失感が僕を襲い、

切なく苦しくなる。

記憶通りに走り出そうとする二人に、

僕は待ってと声を掛けた。

「そっちは遠回りだよ、

今日はこっちを通って帰ろう・・・？」

風介とリュウジに手は繋がれていないけれど、

晴矢とヒロトを救う事で精一杯だった。

そんな時、

「おいっ・・・あれ!!」

周りは何故か五月蠅い。

その人達が見上げている方を向いた。

そこには・・・

グラついて此方へ倒れてくる電柱があった。

咄嗟に、何の本能か知らないけれど、

僕は弾け飛ぶ様に、

風介とリュウジのところへ跳躍していた。

驚いた顔をした二人だったけど、

「リュウジ！！！」

「分かってるよ！」

「晴矢！ヒロト！」

「ふたつ、り、とも！！！」

僕を庇う様に立ち塞がっている風介の叫びに近い声で、

リュウジが僕を押しつけた。

この中で誰よりも小さい僕は、

よろけるというかはぶっ飛ばされる勢いで晴矢といヒロトの処へと、

突き飛ばされた。

二人に手を伸ばしても、

もうそこに二人はいなかった。

重力に逆らわずに倒れた電柱は、

風介とリュウジに突き刺さった。

僕の聴覚を支配したのは、

周りにいた人達のかんざく様な悲鳴と、

何処からともなく聞こえてきた、

涼しげな風鈴の音。

「・・・ふ、すけ・・・」

リュ、・・・ジ・・・」

泣き叫ぶ事もできず、

嗚咽しか出てこない。

「レイン！しっかりしろよ！」

「頑張つてレイン！」

お願いだから僕達の言う事を聞いて！！」

「嘘・・・だ・・・」

無意識に呟いていた言葉に、

又応える

《嘘じゃねえぜ》

僕を嗤う陽炎。

もう死体と化している風介とリュウジは、

あの時の同じ、

何か満足そうに微笑んでいた。

*

*

*

僕はきつと、

気が付いていた。

この、

何時までも輪廻する事の意味を。

僕は知っていた、

夢なんかじゃ、

嘘なんかじゃないって。

皆も気が付いていたんでしょ？

きつと、

結末は1つだけだ。

*

*

*

僕は走っていった晴矢とヒロトの背中を追いかけるように走り出した。

袋に入ったアイスが地面に落下した。

そんなの、気にならない。

僕を制止する風介とリュウジに笑いかけた。

「大丈夫だよ。」

にっこりと微笑むと、

手を振った。

今、正に赤に変わろうとしている信号機。

僕は何の躊躇も無く飛び込んだ。

ふと見えた時計は、

12時半を指していた。

僕は二人をドンッと押しのけた。

次の瞬間、

僕はトラックにぶち当たった。

視界がまっ赤に染まり、

飛び散った血しぶきが、

絶望を移した四人の瞳に乱反射した。

だんだんと遠のいていく意識の中で、

不満そうな陽炎に僕はにやりと嗤った。

「ざまあみる」

悔しそうに顔を歪ませた陽炎に、

軋む体に最後の力とばかりに意識を集中させて、

四人へと手を振った。

君の負け。

僕の勝ち。

僕だって、

陽炎だよ？

*

*

*

ベッドの上で、

四人の少年は悔しそうに呟いた。

又、失敗した。

そこに、

僕はいなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6135z/>

カゲロウデイズ

2011年12月20日17時53分発行